

Ralph と riding hero

— *Night and Day* 一考察 —

太 田 素 子

はじめに

Virginia Woolf は最初の二作品である *The Voyage Out* (1915) と *Night and Day* (1919) を伝統小説の型を踏襲して描き、三作目の *Jacob's Room* (1922) から彼女の新しい手法による実験小説を始めたと言われている。小説として二作目にあたる *Night and Day* (1919) は女主人公 Katharine Hilbery の、恋愛の成就と結婚というきわめて幸福な closed ending で締めくくられている唯一の作品であり、処女長編 *The Voyage Out* の女主人公の死という悲劇的結末と合わせて、作者は両者に伝統小説の closed ending の二つの典型をあてはめている。しかも伝統的小説の枠組みの中に、登場人物の内部意識をイメージ等を通して探っていくという手法も既にこの作品で用いられている。本論では、その一つとして Katharine の空想の中にしばしば登場する海辺で「馬を走らせる英雄」(riding hero)¹⁾ のイメージを取り上げたい。riding hero というとすぐに連想されるのが *The Waves* (1931) の Percival であるが、本論では *Night and Day* の Katharine が vision を求めていく過程で効果的な役割を果たすと思われる riding hero に着目する。名前を与えられていないこの hero がやがて Ralph Denham という固有の名前に重なり合うことで空想の中の理想の英雄が現実の存在と重なっていく過程をこのイメージを通してたどりたい。さらに、*The Waves* の Percival にも言及しつつ riding hero の意味²⁾ を考えることで Virginia Woolf 特有の現実と vision という二つの世界が *Night and Day* でどのように描かれているかを明らかにしていきたい。

1. riding hero のイメージの変化

文学者の父と大詩人の娘である母の一人娘である Katharine は、母を手伝って家事や茶会をし、同じく母が祖父の伝記をつくるのを手伝って、昼間は多忙な日々を送っている。そんな彼女にとって一人自由に好きなことをしたり瞑想にふけることの出来る夜は、

大切な時間である。作者は Katharine にタイトルでもあるこの「夜と昼」の意味を作中ではっきり定義させている。

Why, she reflected, should there be this perpetual disparity between the thought and the action, between the life of solitude and the life of society, this astonishing precipice on one side of which the soul was active and in broad daylight, on the other side of which it was contemplative and dark as night? Was it not possible to step from one to other, erect, and without essential change? (358-9)

タイトルは Virginia Woolf の作品の中で常に重要な意味を持っているが、作者自らがこれだけ明確に定義をしているのは他にはない。上記の引用部分で作者は、昼に属する特性として“action”、“life of society”、“active”を、一方夜には対照的に“thought”、“life of solitude”、“contemplative”をあげている。「行動、社会（社交）」の昼に対して、「思考、孤独、瞑想」の夜である。この二つの世界は“disparity”と描かれつつも、「背筋をしゃんと伸ばして、自分は本質的な変化はせずに二つの世界を行き来することは可能か」という問いかけがなされている。この「行き来」(to step from one to other)という考え方は *Night and Day* を特徴づける考え方である。Virginia Woolf の *Night and Day* 以降の作品では、二つの世界という図式は徐々に次のように変化していく。一方に、時計の時間に支配されて老いと死へと不可逆的に進まざるを得ず、他者との隔壁に苦悩する苛酷な現実世界がある。もう一方は vision の世界で、苛酷な現実世界から解放される世界として Virginia Woolf は具体的には、生の中では moment を、そして究極の達成としては死を設定している。これが Virginia Woolf の相反する二つの世界である。しかし、*Mrs. Dalloway* 以降彼女の代表作において vision を脅かす現実世界の苛酷さは、*Night and Day* ではまだそれほどの厳しさを帯びていない。又 Katharine は現実に束縛されていると感じていながら、夢と現実の間を行き来出来る方法を模索している点がこの作品の特徴である。相反するのではなく、行き来出来るということは、二つの世界が安定して存在しなければならない。Virginia Woolf の作品世界では、現実世界はまず前提条件として厳と存在する。それ故、行き来出来るということは vision の世界も確かな存在であることを意味する。本論では、空想の中の riding hero がやがて現実の恋人 Ralph に移行する過程の中で、空想の世界が一旦脅かされながら、より安定した形で確保されていくまでを考察していくが、まずは、この過程を示す hero の引用文には (1)~(5)と番号を付けて、riding hero の意味と変化をたどっていきたい。

夜、自分の部屋に戻って一人になった Katharine が「夜の無の中に我を忘れて」空想

に耽るとき、riding hero が Katharine の夢の中で初めて語られる。

- (1) “What would Mary Datchet and Ralph Denham say?” she reflected, pausing by the window, which, as the night was warm, she raised, in order to feel the air upon her face, and to lose herself in the nothingness of night.

.....

Not having experience of it herself, her mind had unconsciously occupied itself for some years in dressing up an image of love, ... and the man who inspired love, which naturally dwarfed any examples that came her way. Easily, and without correction by reason, her imagination made pictures, superb backgrounds casting a rich though phantom light upon the facts in the foreground. Splendid as the waters that drop with resounding thunder from high ledges of rock, and plunge downwards into the blue depths of night, was the presence love she dreamt, The man, too, was some magnanimous hero, riding, a great horse by the shore of the sea. They rode through forests together, they galloped by the rim of the sea. But waking, she was able to contemplate a perfectly loveless marriage, as the thing one did actually in real life, for possibly the people who dream thus are those who do the most prosaic things.

(106-8)

この riding hero の空想にふける直前に、彼女は別の件で「Ralph なら何と言うだろう」と Ralph のことを一瞬思い出している。しかし、主として彼女の心を占めていたのは婚約者 William からの行き届いた手紙であった。誠実さも節度も備え、情熱にも欠けていない William の手紙はしかし彼女に何の感銘も与えない。彼女は彼との結婚を “a perfect loveless marriage” として選択したのであった。好意は持っているが何ら感情的に束縛を感じない William との結婚と昼の生活は大切な夜の瞑想を、riding hero の登場する空想世界との行き来を円滑にするための手段であると彼女は考えている。現実世界に束縛されたくはない。葛藤を伴う愛、結婚に伴う束縛もいやだ。しかし、確実に空想の世界と行き来するためには、現実世界で感情に縛られないようにするには、彼女をよく理解してくれる人との “loveless marriage” は理想的な手段になるはずであった。そうまでして守ろうとする空想の中に登場する riding hero に彼女は love という言葉を多く用いている。この hero は空想の世界の存在である故に、現実の感情の葛藤を全く伴わず素直に喜びをもって愛せる理想的な恋人のイメージである。彼が憧れの存在であり続ける限り、彼女は心おきなく愛という言葉で彼を語れるのである。それ故、後にこの

heroがRalphと重なってくる時、彼女は現実の侵入に脅えてheroに対する愛という言葉を用いなくなる。しかし今Katharineはこのheroと二人で空想の海辺を疾駆し幸福感にみだされているのである。*The Waves*のPercivalも又riding heroのイメージで語られている。“He is about to leave us, to go to India.... He is a hero.”³⁾ “Percival is going, ...I see India...the low, long shore.... He rides on.”⁴⁾とPercivalは描かれる。彼は*The Waves*の六人の登場人物の生涯の憧れの対象である。彼らは口々に彼を賛美する。彼が参加すると、それまでばらばらだった六人の集まりに喜びと和がもたらされる。彼は現実の存在であるにも関わらず、ただ六人の口を通して語られるだけの存在で作中一言も言葉を発さない。この点も*Night and Day*のheroと共通している。しかしPercivalはインドへ行き落馬して死ぬ。⁵⁾彼は同じく理想の存在として憧れられながら死へと直進して、後期小説の世界を体現するのである。一言も発さず、憧れの、愛と賛美の対象で、海辺に馬を走らせ、heroと呼ばれるなど、*Night and Day*のriding heroは*The Waves*のPercivalの原型となるイメージと言える。しかし、一方方向に死という終点に向かい、戻らなかったPercivalと異なり、*Night and Day*のriding heroは現実の存在であるRalphに融合していくことで姿は消えてもその本質は存続して作品のhappy endingをもたらししている。ここが*The Waves*のPercivalとの違いであり、両作品の違いでもある。もっとも(1)の場面のhero自身は純粋に空想上の存在で、まだ特定の男性の影が感じられない分、純粋に憧れの対象として理想化されているのである。

次にriding heroの登場する場面も又、Williamとの関連で語られる。KatharineがWilliamの家にお茶に招待され、二人が話をしている場面である。彼女はここでWilliamとの結婚を決意しつつ、Williamと会話をかわしながら彼とは無関係の空想の世界に入り込もうとする。しかし、彼女はWilliamといるときに“*She could not entirely forget William's presence.*” (141)と彼の存在が気になって自分の空想の世界に没入することが出来ない。彼女がWilliamと愛のない結婚をしようと決意したのは、彼に感情的に束縛されずに済む分、自由に空想の世界と行き来出来ると思ったからであった。しかし、その目論見は果たせず、一方でWilliamの存在を気にしつつ彼女は空想の世界に入ってheroと馬を走らせるのである。

- (2) She felt certain that she would marry Rodney.... However the embellishment of this imaginary world might change, two qualities were constant in it. It was a place where feelings were liberated from the constraint which the real world puts upon them; and the process of awakening was always marked by resignation and a kind of stoical acceptance of facts. She met no

acquaintance there, as Denham did, miraculously transfigured; she played no heroic part, But there certainly she loved some magnanimous hero, and as they swept together among the leaf-hung trees of an unknown world, they shared the feelings which came fresh and fast as the waves on the shore. But the sands of her liberation were running fast. (144-5)

(1)の引用には直接登場しなかった Ralphがこの(2)では“as Denham did”と登場している。彼女とRalphの空想には違いがあるという例であるが、しかしたとえ違う点の例としても、Ralphは確実にKatharineの空想の中の理想の恋人を思う場面に入り込んできている。この場面のheroは、彼女と一緒に馬に乗り彼女と一緒に爽快な気分を共有している。Ralphの存在はこのheroとはまだ重なり合わない。それ故heroは彼女を昼の束縛から解放してくれる存在でもあり、彼女の理想の恋人である。彼女は安心して空想世界の恋人に“she loved some magnanimous hero”とためらわずに言えるのである。

空想の世界を守る手段としてWilliamと結婚することを自らの意志で選択したにもかかわらずKatharineは“Not to be happy, when she was supposed to be happier than she would ever be again... and seemed now so intolerable.” (201-2) という風に、耐えられないという思いに悩まされて、感情に束縛されている。幸せに思えないのは、Katharineの意識には未だ上ってはいないがRalphの存在の影響がある。後にRalphが自分を愛していると知った後で、二人で川岸通りを歩く時、彼女はWilliamの場合とは対照的に“She was feeling happier than she had felt in her life” (317) と感じているからである。今の自分の浮かない気持ちを従兄弟に相談しようかとKatharineが自問自答しているとき、heroが彼女の心の中に現れる。

(3) Somehow simultaneously, though incongruously, she was riding with the magnanimous hero upon the shore or under forest trees, and so might have continued were it not for the rebuke forcibly administered by the body, which, content with the normal conditions of life, in no way furthers any attempt on the part of the mind to alter them. She grew cold, shook herself, rose, and walked towards the house. (205)

既に二度登場したときheroは彼女にとって心おきなく幸福な気分で愛情表現の出来る存在であった。しかし、ここに登場したheroに彼女はとまどいを見せているのは何故か。Ralphとheroはまだ重なり合いはしないが、これまで二度heroが登場したときには、その都度一言Ralphに関する言及があった。さらにRalph個人に対しては既に“a

feeling about life that was familiar to her” (94) と共通性を彼女は感じている。それ故、今回は言及がない分一層、hero には Ralph の存在が感じられる。しかも、ここで初めて彼女は理想の恋人への愛情を素直に出せずに、“somehow” (どういう訳か理由はわからないがともかく)、“incongruously” ととまどいを見せている。さらに、これまでのように hero と二人 (they) で駆けていくのではなく、“she was riding with the magnanimous hero” という風に、hero と二人ではなく彼女自身が主語になって「hero と共に馬を走らせた」と彼女自身の主体的な行動が描かれている。彼女が戸惑っているのは、hero の存在が純粋な空想世界という安全圏にとどまらずに現実味を増しているからで、つまり二つの世界の境界が揺らいでいるからで、彼女は空想世界の安全性が脅かされ、現実が侵入してくるのを本質的に恐れている。しかし彼女は「続けて乗っていたい」とも願ってる。彼女の心に侵入してきた不安と喜びという相反する感情は hero がもはや空想世界の安全圏にはおらず、Ralph という現実の男性と重なり合ってきたことを示している。この場面の彼女はもはや現実世界と切り離された空想世界に安住出来ず、それ故 hero に対して love という言葉を気軽に口に出すことが出来なくなっているのである。

次に、Katharine が William と彼の家で食事をする約束を果たすために通りを歩いている場面で、彼女の心に登場する hero について考えていきたい。この後 Katharine は Ralph の愛を知り hero ではなく Ralph が彼女の愛情の対象となっていく。従って Ralph の存在感の投影されている hero としては最後の登場場面になる。彼と二人で食事をするのは Katharine にとって “a mood of profound despondency” (283) と語られる。しかもあれほど心躍る気分を伴った hero の空想を、彼女は考えてはいけないと自らに禁じているのである。

- (4) If she went by the Strand she would force herself to think out the problem of the future, or some mathematical problem ;if she went by the river she would certainly begin to think about things that didn't exist —— the forest, the ocean beach, the leafy solitudes, the magnanimous hero. No, no, no! A thousand times no! —— it wouldn't do ;there was something repulsive in such thoughts at present. (284)

何故彼女はあれほど楽しんでいた理想の恋人である riding hero の空想を自らに禁じようとするのか。川岸通り (Embankment) は Ralph と歩いた通りである。水辺は hero が馬を走らす海辺に通じる。ここでまさに hero は Ralph への連想と重なり合うのである。しかも Ralph の自分への気持ち が “feeling ... of critical hostility” (291) と確信しているとき、彼女は Ralph が介入することで生じる心の葛藤を強く否定する必要に迫られ

るのである。

不安に駆られながらも、自分の不安の原因に未だ気づかない Katharine は、Strand 通りも Embankment も選ばずに、答を求めて Mary の家を訪ねる。そして Ralph に失恋した Mary が日頃の抑制を失い、Katharine のいる責任も葛藤もない安全な世界を揺さぶるのである。

Katharine was not to be allowed to go, to disappear into the free, happy world of irresponsible individuals. She must be made to realize——to feel.

“I don’t quite see,” she said, as if Katharine had challenged her explicitly, “how, things being as they are, any one can help trying, at least, to do something.”

“No. But how *are* things?” (285)

続いて Mary は “he’s in love with you” (291) と告げる。これまで意識下にあった Ralph の存在感が一気に現実のものとなった。以後 Katharine にとって Ralph は現実の存在となり、riding hero は姿を消す。これまで Ralph の自分に対する感情は “critical hostility” としか思っていなかった彼女は、Ralph の愛という現実に向きあう必要に迫られることとなる。ここで hero と Ralph は完全に重なり合い、その後は彼女の空想の中の理想の恋人としての hero は姿を消し、代わりに Ralph が Katharine の心を占めることになる。

Ralph が Katharine への愛を公言して以来、Ralph に riding hero のイメージが重ねられていった一方で、riding hero のイメージ自体は急速に Katharine の理想の恋人という固有性を失っていく。先祖の詩人の肖像を見ながら、もう一度 Katharine が riding hero に思いをはせる場面がある。しかしこの場面の riding hero はもはや彼女の特定の恋人ではなく、複数形をとっている。

(5) She wondered what he was looking for; were there waves beating upon a shore for him, too, she wondered, and heroes riding through the leaf-hung forests? ... He would have understood ... she brought him her own perplexities. (337-8)

先祖の詩人も自分と同じく hero を求めたのかと思いめぐらす Katharine にとって自分一人の hero を空想世界に求める姿勢はもはや見られない。空想世界で彼女の特定の恋人であった hero は現実の Ralph と完全に重なり合って、空想の世界から姿を消し、(5)の

場面でのheroは固有性を失って複数形をとるのである。

2. Ralphとriding heroの融合

ここまでは、heroの側からKatharineの心の中での変化をたどってきた。今度はRalphの側から、heroとの共通性とRalphの役割について考えていきたい。次第にriding heroと重なり合ってKatharineの空想世界での存在を大きくしていった現実の存在Ralphは、彼女の空想世界の安全性を脅かす存在であろうか。まず、Ralphとriding heroのイメージの共通点として、重要な場面で水辺と川岸通りを背景に描かれていること、又、大股、早足で風をきって歩く様子で描かれている様子⁶⁾を考察し、そこからKatharineの空想世界への現実のRalphの関与のあり方を導き出したい。

RalphがHilbery家を辞する作品の最初の部分で彼は“The young man... walked up the street at a great pace cutting the air with his walking stick.” (16) “his speed” (16)と描かれ、又、RalphがKatharineを川岸通りの方へ追っていくところも“he... ran rather more quickly down the stairs” (60)と進む速さで語られている。heroと共に馬に乗ってスピードを共有したように、KatharineはRalphと二人の進むスピードの速さで描かれている。“She very nearly forgot her companion. She walked very fast.” (92)と語られる場面は、さらに、彼女がRalphがいても気にならずに空想の世界に浸れると気づく後半の場面につながっている。ここで二人が二階建てバスの二階に乗って高い位置から下の世界を見下ろす視点は、馬上の視点と移動に繋がっている。二人が結婚を決意した最終場面にも二人はバスに乗車している。又、リンカンの町でKatharineと出会ったRalphは風に髪を乱しながら立つ彼女にただよう疾走する雰囲気⁷⁾に魅せられて次のように語っている。

...everything about her seemed rapid, fragmentary, and full of a kind of racing speed. He realized suddenly that he had never seen her in the daylight before. (246)

さらに、KatharineがRalphに愛されていることを知って、heroとRalphが完全に重なり合い、彼女の理想の恋人としてのheroが登場しなくなる後半のいくつかの重要場面の背景となっている水辺と川岸通りがある。川岸通りを二人で歩きながら二つの世界を共有する場面、はじめて二人だけで会う約束をしたキュー植物園の湖の岸辺で彼女を待つRalph、さらに二人で川岸通りを歩く最終場面などである。それ以前のheroだけがKatharineにとって唯一の理想の恋人であったときにもKatharineとRalphが川岸通

りを歩く場面がある。Katharineの空想のなかで存在感が増していることなど全く知らず、彼女の婚約を聞いてショックを受けたRalphが川岸通りを歩いていく様子は“Ralph strode with extreme swiftness along the Embankment.” (161)と語られている。速いスピードで水辺を進む様子は彼の心理状態を表す一方でRalphをriding heroに重ね合わせる役割も大きい。KatharineがはじめてRalphと二人だけで待ち合わせをするのはキュー植物園である。そこで彼女を待つRalphは植物園の湖の岸辺にすわっている。二人で歩きながら、彼が仕事を辞めてcottageで本を書きたいと言うのに対して、彼女は“Shall you be near the sea?” (353)と問いかけている。riding heroがRalphに重なって連想される場面である。

さらに、Katharineの心の中ばかりでなくMaryの心の中でもRalphとheroのイメージが重ね合わされる場面がある。Ralphへの失恋があきらかになり失意のMaryが、Ralphのよく歩いていた川岸通りに出て、記念碑のheroの一つと向かい合わせに座り、Ralphとの今後の関係をみつめなおす場面である。

Only two articulate words escaped her, muttered beneath her breath —— “Not happiness —— not happiness.”

She sat down on a seat opposite the statue of one of London’s heroes upon the Embankment, and spoke the words aloud... She had been up there and seen the world spread to the horizon. (273)

KatharineだけでなくMaryの心の中でもRalphとheroが重なり合うこの場面で、Ralphとheroのイメージのつながりがより明らかになっている。

KatharineがRalphの愛を知った時点で、彼女の空想世界の中のheroのイメージは消えた。では、heroのイメージと慎重に重ね合わされてきたRalphは、Katharineに現実の葛藤と束縛をもたらすのか、あるいは、heroの代役をつとめ得るのか。heroのイメージと重なり合ったRalphがKatharineにもたらすものを、川岸通りを二人で歩く二つの場面から考える。まずRalphの愛を知った後、二人でEmbankmentを歩く場面のKatharineの二つの世界を考える。

She was feeling happier than she had felt in her life... all the time she was in fancy looking up through a telescope at white shadow-cleft disks which were other worlds, until she felt herself possessed of two bodies, one walking by the river with Denham, the other concentrated to a silver globe aloft in the fine blue space above the scum of vapours that was covering the visible world.

She looked at the sky once, and saw that no star was keen enough to pierce the flight of watery clouds now coursing rapidly before the west wind. She looked down hurriedly again. There was no reason, she assured herself, for this feeling of happiness; she was not free; she was not alone; she was still bound to earth by a million fibres; every step took her nearer home. (p. 317)

RalphはKatharineに“we’re some sort of agreement; that we’re after something together; that we see something” (315) と、二人は同じものを求めていると言う。実際彼も又、彼女の空想の世界に匹敵する夢の世界をもっている。そのような彼と一緒にいると彼女は「二つの肉体」つまり現実の世界とvisionの世界の二つの世界を同時に違和感なく体験する。しかも彼女は“she was not free”と感じながらも、そこに束縛ではなくて「幸福感」を感じている。Katharineは現実の束縛をそれ程感ずることなくriding heroと融合したRalphを受け入れ得たのである。彼女はWilliamといるときには“She could not entirely forget William’s presence.” (141) と彼の存在が気になって、自分の空想に没頭することが出来なかった。ところが、Ralphと一緒にだと、彼と話しながら自分の空想も楽々と楽しめる、つまり「二つの肉体を持つ」という初めての体験をしたのである。Williamとの愛のない結婚によって彼女が企てた試みは失敗した。しかし、heroのイメージと重なり合いつつ現実の存在でもあるRalphを受け入れることで、現実世界と空想世界の対立がほぼ消えて、両者は行き来出来る世界になっている。

さらに*Night and Day*の最終場面で、川岸通りをKatharineとRalphが二人で歩く場面は、「昼と夜」という二つの世界の調和の場面でもあり、heroを受け継いだRalphと彼女の二人が到達した世界の提示でもある。空想世界と現実という二つの世界の構造はどういう結末をむかえるのか。前回川岸通りを二人で歩きながら“she was not alone” (317) と感じた彼女は、今回“You destroyed my loneliness.” (534) とRalphに言う。

They dismounted and walked down to the river. She felt his arm stiffen beneath her hand, and knew by this token that they had entered the enchanted region.... Moments, fragments, a second of vision, and then the flying waters, the winds dissipating and dissolving; then, too, the recollection from chaos, the return of security, the earth firm, superb and brilliant in the sun. From the heart of his darkness he spoke his thanksgiving; from a region as far, as hidden, she answered him.... Pausing, they looked down into the river which bore its dark tide of waters, endlessly moving, beneath them.

(537-8)

“They had entered the enchanted region.”と描かれ、二人の到達した世界として“moments”“a second of vision”“dark tide of waters, endlessly moving beneath them”とまさに Virginia Woolf の後の作品世界における vision の世界を構成する言葉が並んでいる。異なるのは「遠くから語る」Ralph の声に、「はるかな領域から」Katharine が答えているところである。彼女が一人で空想を楽しむ世界はもはや消えている。Ralph が riding hero と重なりあい、Katharine がその Ralph を受け入れることで、この二人はついに vision の世界の体験を共有し、現実と vision の対立を最小限にとどめることによって、二つの世界を行き来可能な世界にしたのである。空想世界の riding hero と現実世界にありながらしかも「夢の世界」をもつ Ralph を、周到に結びつけていくことによって、現実世界と空想世界の対立がほとんど消え、その結果、Katharine は Ralph との vision の共有を果たした。この *Night and Day* 特有の結末は、riding hero と Ralph の融合という精緻な仕掛けを通して見事に達成されたのである。

おわりに

vision の共有が行われたのは *Night and Day* においてだけである。従来、伝統小説を継承する *Night and Day* は、それほど正当に評価されてきたとは思われない。作者が独特の作品スタイルを確立するのは次作 *Jacob's Room* からと考えられてきた。しかし、ヴィクトリア朝とモダニズムの時代を、連続性ととらえていく再評価がおこなわれる昨今、作者が、ヴィクトリア朝の伝統小説とその happy ending の枠組を有効に活用して、しかも、riding hero という、Virginia Woolf の主要な手法の一つであるイメージャリを精緻に且つ効果的に用いることによって vision の共有という後の作品の原点とも言える世界を提示し得たことを、評価したいと考える。

注

Night and Day, *The Waves* の引用は Hogarth Press の Uniform Edition による。

- 1) この riding hero については Mark Hussey, *Virginia Woolf A to Z* (New York: Facts On File, Inc., 1995) “She[i.e. Katharine] clings to a vision of romantic love symbolized by a ‘heroic Rider’” (110) という指摘が一般的見解であろう。又、吉田安雄「Night and Day —— solitude と society」『イギリス小説研究』(研究社出版、1994) 参照
- 2) Virginia Woolf の作品の根底を成すのは、二つの相反する世界の葛藤である。この二つの世界は、時間論的には時計の時間と心理的時間と呼ばれ、又、fact と vision, granite と

rainbow 等とも呼ばれている。*Night and Day* では「昼」と「夜」に代表されているこの二つの世界を、本論では「現実の世界」「visionの世界」と呼び、Katharine が一人で浸るは「空想の世界」も vision の世界の一つと考えていく。

cf., Alice van Buren Kelley, *The Novels of Virginia Woolf : Fact and Vision* (The University of Chicago Press, 1971) p.254, Yoko Sugiyama, *Rainbow and Granite : A Study of Virginia Woolf* (Tokyo: The Hokuseido Press, 1973)

3) *The Waves*, 88

4) *Ibid.*, 97

5) *Ibid.*, 107-8

6) Ralph と Katharine の歩く速さについては、Thakur は“according to their state of mind”と解釈する。これも一つの考え方であるが、本論では、riding hero のイメージと重なり合う点を重視した。

cf., “Ralph and Katharine, too, in *Night and Day* are found walking, tramping, or running according to their state of mind. When mentally perturbed, Ralph walks ‘up the street at a great pace, cutting the air with his walking-stick’ (p.16), or strides ‘with extreme swiftness’ along the Embankment (p.161).” N.C. Thakur, *The Symbolism of Virginia Woolf* (London: Oxford University Press, 1965), 30

7) 川についても Thakur は次のように指摘している。

“Whenever the characters in these two novels muse about life, especially married life, they think of, or peer down into, a river.” (*Ibid.*, 32)